

にいがたの
気鋭

動物をモチーフに木工作品を制作している。三角や四角などの木材を積み上げた「麒麟」や、つまようじで扇形の羽をかたどった「孔雀」など、高さや幅が数メートルにわたる実物大の作品も少なくない。

材料は工務店などから譲り受けた廃材だ。けば立った切りっぱなしの切り口やふぞろいな色や形といった、廃材ならではの特徴を生かし動物の毛並みなどを表現している。「捨てられる物が多い現代で、廃材にも可能性がある」と知ってもらいたい」と話す。

村上市出身。大工だった祖父の影響で、幼い頃からものづくりが



かじ・せいや 1996年、村上市生まれ。村上桜ヶ丘高、長岡造形大卒。長岡市栃尾地域在住。

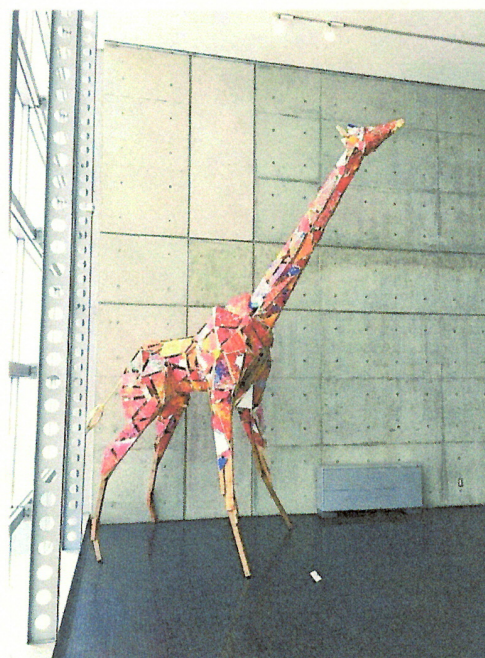
造形作家・加治聖哉

廃材で緻密に動物表現

好きだった。気づけば、身近にある木材を使って小物を作るようになっていた。

進学した長岡造形大では彫金を専攻した。しかし加工のしやすさや、組み合わせ方によってさまざまな物を表現できる木材に魅了され、木工作品の制作にのめり込んだ。

発想の源は映画や漫画。作中で見て「かっこいい」と感じた動物の特徴などを調べて制作に取りかかると。こだわりは「その動物らしい雰囲気や伝わるような作り」だ。背中を反らせてしなやかに伸びをすネコなど、「一目見てどの動物か分かるようにしている」という。実物大にしているのは「リアルさを感じてほしいから」。大きさをけでなく、木材の配置や材質に気



「麒麟」

を配ることで筋肉など細部も表現し、「本物を見たような迫力」を感じてもらえるようにしている。

大学を卒業して東京で1年間働いた後、2019年7月に地域おこし協力隊員として長岡市栃尾地域に移り住んだ。同地域に住む作家や豊かな自然からインスピレーションを得て、「ふつと発想が生まれてくることもある」と語る。

地元住民から廃材や制作場所の提供を受け、創作の大きな支えになっているという。「おいしいご飯もこちそうしてもらい、すごく元気が出る」と笑う。今後については「一人前の作家として認めてもらえるよう、木工だけでなく彫金作品などオールマイティーに作っていきたい」と力を込めた。

(随時掲載)